

2011 年度前期学生授業評価アンケート集計結果に対するコメント —文芸学部—

文芸学部長 上野 英二

この種のアンケート調査がどれほどの真を捉え得るものか、またそのデータの解析を素人がよく成し得るものか、はなはだ心許ない。まして、その価値判断ともなると、速断は大いに憚られるところである。

しかしながら、ここにそれについての学部長としてのコメントを求められたので、本調査の結果から窺い得る一種の傾向について、文芸学部の日常から推し測られるところなどを勘案しつつ、個人的な所感を述べることとする。

まず、文芸学部が開設する科目のアンケート参加度が 74.3%と非常に高かったこと（大学全体で 62.7%）、及びすべての設問の平均値が大学全体のそれを上回っていることは、これも見解の分かれることもあろうかと考えられるけれども、傾向としては概ね慶賀すべきことか、と思われる。

また、設問 7「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促した」の平均値が 4.11（大学全体で 3.78）、設問 8「授業への教員の熱意を感じた」の平均値が 4.38（大学全体で 4.29）と非常に高いことからすれば、教員の積極的な授業展開が窺えようか。

また、設問 12「総合的にこの授業は評価できる」の平均値が 4.32 であることも、ひとまずは慶ぶべきことか。それが安易な迎合に堕すものでないことを祈る。

いずれにしても、上記の結果は、授業担当の教員各位の努力によるところ大と思われ、その尽力を多としたい。願わくば、それへの反応として、設問 14「予習または復習をよくした」の平均値 3.44（大学全体で 3.07）などが一層伸びることが期待されようか。

しかし、冒頭にも記したように、このアンケート調査については、教員・学生各位の賢察に俟つところ大で、その評価については、各位の良識ある判断に期待する。